

被災児心のケア重要

AMDA活動報告

救える命があれば

どこへでも

□ 3 □

菅波 茂



同志の集い

トラル病院の大城七子看護師が参加した。二〇〇四年十二月二十六日よりの昼夜を問わずに活動を共にした同志でもある。百年の知己の如しであった。

「朋有り。遠方より来る。また楽しからずや」
論語の一句が再現されたのは三月十二日と十三日であった。十二日は「国際救援シンポジウム」岡山から世界へ（主催・岡山県、公設国際貢献大

学学校）、十三日は「AMDA多国籍医師団復興支援会議」が岡山で開催された。
インドネシア、スリランカに派遣された沖縄セン

被災した人々の夢を育むのは復興支援プログラムである。復興会議では、各国から切実な提案がなされた。子どもの夢に対する想像力の育成や心の後遺症を解消する内容が圧倒的であった。頻りに災害に見舞われる地域であるにもかかわらず、対策が地域にまで行き届かず、子どもに多くの犠牲者が出たからだ。

インドネシアからは、子どもたちを対象とした巡回図書館や日本の子どもたちとの絵の交換により励ましあおうとする友情プロジェクトの報告があった。

カナダ支部から参加したソーシャルワーカーのアソニー・リチャーズさんは、二千人以上の子どもが亡くなったスリランカの東部にあるカルムナイという地区の出身者だった。彼の肉親も六人以上が、そしてたくさん

各国スタッフ 切実な提案



設するという彼の提案は涙なくしては聞けなかった。数年かけてもAMDAとして世界に呼びかけ

て実現させようと誓い合

国際救援シンポに勢ぞろいしたAMDA各国支部のメンバーたち岡山市（AMDA提供）

難を共にするパートナーシップのネットワークを拡充してきた。活動のローガンは「必要とされればどこへでも行く」。特に大事なものは「災害発生の当日に現場に参加することである」。

そのためには、参加スタッフの編成をはじめ、各国支部と災害現場とのコミュニケーション、安全、活動資金の確保、被災地への物資の輸送など多くの課題をクリアしなければならぬ。すべてが時間との戦いである。AMDA多国籍医師団は発足後約十年の試行錯誤を経て、これらの困難に

対応するシステムを強化充実し、今回のような大災害で大規模広範囲な緊急救援活動が可能となった。

世界各地におよぶ多国籍医師団の救援活動のうち、中南米での活動のきっかけは、AMDA沖縄支部から初めて海外の緊急医療活動として医師と看護師が派遣された、九年のハリケーン「ミッチ」によるニカラグアとホンジュラスにおける被災者救援活動だった。中南米における救援活動に

これは沖縄の人たちとの連携なしには考えられない。沖縄の皆様のご理解とご支援を心からお願ひ申し上げたい。

この連載は毎月第四日曜日に掲載します。